

村越潔著 『円筒土器文化』

福田友之

1.

現在、日本考古学協会々員、並びに弘前大学教育学部助教授として本県考古学界の指導的立場にある著者が、このたび円筒土器等に関する積年の研究結果をまとめられ、『円筒土器文化』と題して、雄山閣より上梓されたことは、学生の頃より、親しく教えをうけている者の一人として、誠に嬉しく、心よりお慶びを申し上げる次第である。

著者は円筒土器関係の遺跡を最も多く手がけられている研究者であるが、昭和四〇年、円筒土器諸型式を層位的に出土した石神遺跡の調査に直接かかわって以来、該土器等の研究の志をたてられたと伺っている。

2.

縄文時代の前期から中期にかけ、北海道西南部から東北地方北部において円筒形を基本とした大型の厚手の土器群が盛行する。これらの土器群は器形上のきわだった特徴及び土器上半部の裝飾文様の独自性、更には特徴ある伴出遺物の存在等によって、古くから注意されてきた。これらの土器群に対して、長谷部言人・山内清男の両氏が円筒土器の名称を与えて以後、本土器の研究は専ら山内氏にとってかわられるこ

ととなる。同氏は昭和四年、「関東北に於ける織維土器」（史前学雑誌）一一二の記念すべき論文の中で、大正一四年五月発掘になる北津軽郡市浦村オセドウ貝塚における層位的所見により、円筒土器が下層式と上層式に二分され、前者が a・b・c・d の四型式、後者が a・

b の二型式に細分されることを指摘した。更に、昭和一二年には、同氏によって、縄文土器の型式編年図が発表され、円筒土器下層式は縄文前期に、同上層式は中期に位置づけられることとなった（縄文式土器型式の細別と大別——「先史考古学」二一）これによって、円筒土器の型式編年、更には、その編年の位置が明確にされることとなった。この円筒土器の諸型式については、この後、二、三の研究者により新型式の追加、更に型式細分がなされ、現在では江坂輝弥氏の分類が最も細分を極めている（円筒土器下層式 a1・a2・b1・b2・c・d1・d2、同上層式 a1・a2・b・c・d・e・f の一四型式）（『石神遺跡』）

この型式編年の追加、細分化と併行して、円筒土器関係の遺跡の発掘調査が進み、堅穴住居址等の遺構及び各型式の共伴遺物の出土例も増加し、その文化内容は次第に明らかにされつつある。

しかしながら、山内氏による円筒土器諸型式の内容が遂に明確な形で発表されなかつたため、氏が設定された各型式の理解が各研究者によって区々であるといった状況もみられ、各研究者による諸型式を整理するといった基礎的作業が望まれていた。また、いったい円筒土器に共伴する遺物内容は何の様なものであるのか、更に、遺構・食料資源等の内容についても集大成する必要も叫ばれてきていた。

右の様な状況とは別に、円筒土器等をめぐる重大な社会的状況があ

る。

昭和四〇年代の中頃から、開発前線は東北、北海道にも上陸し、毎年激化の一途をたどってきている。とくに東北地方北部及び今後、開発が激化する北海道南部は円筒土器の分布地域であつて、円筒土器関係の遺跡が軒並み破壊されてきている。因みに、昭和四八年に道南地方で実施されたこの種の開発に伴う緊急（行政）発掘調査は一四件であるが、このうち七件が円筒土器を出土する遺跡の調査であり、昭和四九年においては九件のうち五件までが円筒土器関係の遺跡調査である。

これらの調査は大部分が一〇〇〇平方米以上の大規模な調査面積を有するものであり、従来一般的であつた小規模発掘では知りえなかつた新資料・新事実はほう大な量になつて蓄積されてきている。この様な状況にあつて、円筒土器関係の遺跡・遺物等の集成は焦眉の問題であつたという側面も見逃すことはできない。

以上の様な状況のもとに、本書が出版されたことは大きな意義をもつものと言えよう。

### 3.

本書は、著者が昭和四三年、四四年の二カ年に亘り、弘前大学で「円筒土器文化の研究」と題して講義された際の講義内容を基礎としたものである。本書の構成は左の通りである。

### 序

はしがき

### 序説

## 第一章 円筒土器文化研究史

### 第一節 終戦以前の円筒土器文化研究史

### 第二節 戦後における円筒土器文化研究史

## 第二章 円筒土器の命名と形状

### 第三章 円筒土器の分布

## 第四章 円筒土器の型式と編年

### 第一節 円筒下層式直前の土器

### 第二節 円筒下層式土器

### 第三節 円筒上層式土器

### 第四節 円筒上層式直後の土器

## 第五章 円筒土器に伴う人工遺物

### 第一節 石器および石製品

### 第二節 土偶および土製品

### 第三節 骨角器

### 第四節 その他の人工遺物

## 第六章 円筒土器に伴う自然遺物

## 第七章 円筒土器を出土する遺跡と遺構

### 第一節 遺跡

### 第二節 遺構

## むすび

次に本文について、その内容を紹介したい。

序説においては、円筒土器及びこれに共伴する石器、骨角器、土製品及び石製品、また円筒土器を出土する堅穴住居跡について各項目別

に概観を試み、本論の各章でとりあげる内容を圧縮した形で述べている。このため、序説部分で円筒土器等についてのあらましを知ることができる。

第一章では、第二次世界大戦前・後といった画期によって概説している。前者では「永祿日記」の記載から始まり、明治・大正・昭和年間（大戦前）と年代順に円筒土器関係の報告・論文等を紹介し、円筒土器の型式編年の一応の確立までという研究史の位置を明らかにしている。また後者では、主として昭和二四年から三九年まで、年次毎に東北・北海道における円筒土器関係の発掘調査の概要及び報告・論文等について、それぞれの意義を述べ、戦前に比して、発掘調査件数の増加、とくに昭和四〇年以降は緊急発掘調査件数の激増現象がみられる点を指摘している。また諸発掘により、山内氏の型式編年が確認された段階であるとし、一応の評価を加えている。

第二章では、長谷部論文に抛り、円筒土器の形態及び地文等について概説し、円筒土器の胎土に混入する植物繊維の問題にも触れている。

第三章は著者が以前に「考古学ジャーナル」誌に発表した論考（一九七〇）に訂正・追補したものであり、円筒土器が北は北海道・石狩、勇払低地帯から、南は山形県中部、岩手県南部まで分布することを述べ、遺跡分布の密度の上から、本県が円筒土器文化の中心地であることを指摘している。更に諸型式の土器の分布を概観した後で、円筒土器とはほぼ同時に主として東北地方南部で盛行した大木式土器との分布上の関係についても述べている。

第四章は本書の中で著者が最も力を注がれた部分である。第一節は

著者が以前に「北海道考古学」誌上に発表した論文（一九七三）に加筆、訂正したものである。ここでは、東北地方北部において円筒土器が出現する前の段階、つまり縄文前期初頭の土器群について説明を加えている。第二節では円筒土器下層式をとりあげ、同 a・b・c・d

式の各型式について、山内氏による型式内容及び江坂氏等による型式内容について触れたあと、著者が調査に関係した石神 I 号遺跡の層位的結果を踏まえ、従来の下層式 a・b・c・d<sub>1</sub>・d<sub>2</sub> 式の諸型式のうち、a 式・b 式をそれぞれ、第一類から第三類まで細分し、著者の下層式土器の型式観を打ち出している。又、円筒土器下層式 d 式の地方型式として、秋田県の狐岱式、山形県の吹浦式土器についても触れている。

第三節では、円筒土器上層式をとりあげ、同 a、b 両型式について、前節と同様、山内・江坂両氏の型式内容について触れたあと、著者の見解を述べている。又、同 c・d 両型式については、江坂氏の見解を踏まえた上で、著者自身の型式観を出している。また、同 e 式については、著者が以前より提唱されていた型式名であるが、江坂氏の述べた e 式とは内容が異なり、むしろ江坂氏の上層 f 式（最花式）の一部に当る点を明白にしている。第四節では、円筒土器上層式直後の土器群をとりあげ、学史的に著名である榎林式、最花式の両型式について、前者を大木 8 b 式、後者を大木 9 式の影響をうけた土器に対比されるという点を述べている。

第五章では、円筒土器に伴なう人工遺物についてまとめている。第一節では円筒土器下層式に伴なう石器・石製品として、石鏃・石槍・石匕・鏡状石器・半円状扁平打製石器・石錘・スクレパー・磨製石斧・

磨石・浮石製品・岩偶・岩版・鋸形石製品・玉類・珠状耳飾・石冠・その他の石製品をあげ、同上層式に伴なう石器・石製品としては、半円状扁平打製石器・石匕・磨製石斧・岩偶・玉類・石製装身具をあげ、それぞれに伴出した土器型式及び機能等について考察を加えている。第二節では、土偶及び土製品をとりあげ、円筒土器下層式・同上層式等に伴なう土偶及び土製品について、その形態・時期等につきまとめている。第三節では骨角器をとりあげ、その種類・遺跡・伴出土器型式について一覽表にまとめている。第四節では、その他の人工遺物として、貝製品をあげている。

第六章では、円筒土器に伴なう自然遺物を取りあげている。円筒土器に伴出する貝類・魚類・鳥・哺乳類・人骨更に植物性遺物をあげ、それぞれの種名・貝塚名・伴出土器型式（埋葬形態）、等について一覽表形式にまとめている。

第七章では、遺跡と遺構について述べ、第一節の遺跡の部分では、円筒土器を出土する遺跡を一一カ所あげ、各遺跡の概要・立地・性格等についてまとめ、第二節では円筒土器を出土する遺構をとりあげ、堅穴住居跡・ピット（土壙）及び土器の特殊な出土状態について、遺跡名・伴出土器型式・プラン、性格等をまとめている。

#### 4.

ここでは、本書を読んで少しく気がついた点について記してみたい。第二章においては、円筒土器の形状・地文等について説明されているが、これに円筒土器の製作技法及び施工方法等のテクノロジカルな面からの説明を加えて記述された方がより理解しやすいものと思われる。

る。とくに円筒土器の縄文原体は、円筒土器の研究では、ゆるがせにできない基本事項と思われる。また、第三章において、分布の問題に關し、円筒土器上層式の分布が下層式より広い旨述べられている。この点、以前に発表された論考「円筒土器の分布」(季古学ジャーナル(一九七〇)と著しく異なるわけであるが、これについて何らかのコメントが欲しいところである。次に、本書の引用文献に關してであるが、印刷上の都合でカットせざるをえなかったものと思われるが、巻末に、円筒土器関係文献目録として一括されれば、より利用しやすいように思われる。再版の折に御一考戴きたい。また、本文中に円筒土器に伴出した人工遺物なり、遺構等の実測図を多く掲載して戴ければ、より具体的に円筒土器文化の内容を理解できるものと思われる。

以上、盲蛇に怖じずで、勝手なことを述べさせて戴いたが、口絵写真は三四枚と豊富であり、しかも未発表資料も含まれていることは、読者にとつて極めて良心的であると言えよう。

本書をまとめるにあたって、多くのデータ、文献等を渉猟され、円筒土器文化の研究史から各種遺物、遺構等について集成されている点は、これから新しく、円筒土器等の研究を志す者にとつて、問題点の所在を知ることができ、大いに参考になる。とくに第四章では、従来諸研究者によつて区々に把握されてきていた円筒土器の各型式について、多くの図を掲載し、各研究者の形式観をまとめた上で、著者の見解を加え、型式及び編年の問題について整理されている点は、円筒土器研究の基本的な問題に關わるものであり、すこぶる意義あることと言える。ただ、読者の中に、本書に使用されている資料には、青森県

以外の資料が極めて少ないという感想をもたれる方があると思われるが、著者が本書を今後の円筒土器文化研究の進展のための一つの叩き台、踏台とされたいとする意向をくむべきであろう。著者がむすびで述べておられるように円筒土器文化内における地域差の問題、更に周辺地域の土器文化との関係等が今後の大きな課題として残されるが、この点については著者御自身努力されることを約束されている。今後の御研究の進展されることと期待したい。

本書は著者の円筒土器文化に関する研究論文を集めた論文集ではない。言わば、円筒土器文化の概説書、円筒土器文化研究への入門書である。しかも最初の概説書、入門書である。考古研究者、古代史研究者は勿論、東北・北海道の古代文化に興味をもたれる方には是非一読を奨めたい書物である。(昭和四九年一月一五日発行 雄山閣出版)

刊 考古学選書一〇A15判 口絵図版三四枚(うちカラー図版二枚)  
本文二二八頁、定価二五〇〇円)